泊船集

上

中村俊定文庫
文庫 18
139
1

書類
架番號

河船集 叙

黄門宣ふらく乃日訓詣と事祢ハ利
口なるものとあさむなるんちるをしん
きものゝんをつゝものいをぬるものをい
をも利口一毎をうを成をしを訓詣
とつよをまるを消誓をのして註し
於へる河のをして今の正風祢年と
なるを借秘可ハ信伊楚をよゆいこ林を人を

紫水文庫
後定藏

[illegible]の姫[illegible]本行[illegible]も一体和尚乃人
[illegible]
[illegible]ハ人[illegible]おあ[illegible]る菩薩[illegible]方上よあの
[illegible]乃[illegible]いい[illegible]ていとゆる利口なる[illegible]
ま世[illegible]いいと事[illegible]いへるものハ[illegible]數
[illegible]まの上よあわて[illegible]をいい乃
[illegible]ハ[illegible]ハ乃道[illegible]わさ[illegible]
[illegible]有ぬ[illegible]ゆ[illegible]乃いい

歌と歌乃字[illegible]書[illegible]乃有[illegible]
へ[illegible]いい乃[illegible]
[illegible]て道[illegible]人[illegible]
ハ頼朝後頼[illegible]
[illegible]阿近くハ宗[illegible]
[illegible]人[illegible]れるまし其吟
跡ハ一堀[illegible]深く感情を呻
吟[illegible]自[illegible]痩[illegible]

いまゝて西行宗祇の跡をとゝめる
人も聞さりしかとも宗鑑貞徳のてい
ちめてをしるを世人はけにこゝろの
あらはすをきゝて世をしれる集時代
常用もて古代くつまり関の風流世を
きてまゝ道ゝ後ゝ世ゝ西
行の人丸師基蕉翁もて貞徳乃ちゝ
雪月宗祇乃器量ゝ世ゝ人ありき

終りて八郎の数冊ゝ及ひ連歌八条の日々
ゝ五部仏世ゝ乃ひくゝ おひさゝ さゝゝの
いてきて彩ゝ一ゝ同流を発
西行乃陽ゝ世ゝ終乃白ゝ々果不易
のきゝ一時流行の乃多格あきゝ西や
其いゝゝのゝゝゝ あゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝあるゝ八ゝ孫ゝゝ孫ゝゝ蕉翁
ゝゝ郷叶乃きゝ上代ゝありとつゝ

やうやく実説貞恒とうてあひうと
先師を待しそしめて正風好〻人さい
そうもりおのつからそなたに仕事今あとく
人麿再生してもいいよあそし
あまものとも必定手を撫してよと称せん
まことよさいうい乃あるあり乃あきる人倫
世よありそし一生先師の流筆
遺稿旅泊乃書きそし陸〻浦〻

三

まうかうまと今恢晩とも書〻切海を
只集よりも武ハ人の耳よ乃〻を乃ほ
自を捨ひ乃〻ハ新方をわりさを同
士乃あよかりをする遺言一行ともゆんす
沖乃よ乃乃乃ハりを仮集て泊船堂
乃遺稿乃ひとりとすり以僕つきぬき
事よつゝ仏信れを兼魚乃ろハろ人人
校正一あまく其建部乃遺説文言一

四

[illegible]紀若干今[illegible]ぬ雨[illegible]
[illegible]
[illegible]と[illegible]

元祿松一寛[illegible]年　初秋

風國誌識

道

洵船集　壹〻一

苗蔓菊道乃紀

草枕ト云紀行也

千里の旅を[illegible]て路頭を[illegible]
三更月下[illegible]何人といふ[illegible]
[illegible]人乃枕にまのりて[illegible]

亭甲子秋八月江上乃僧屋ニ
いつる程風乃ふきもしる
もなきなるもの

野さらしを心ふかしあきの
秋十かせ都ヲ出て指
南て
関越ル日ハ面影ハ
霜ふれ富士ハ
あらまし

何ゝ菓子ハ
乃名ハ
ハけ多ル路
ふるさとの
乃文ハ
ハ草庵
ハ
ハ肌ハ
ハ信あるル
ハ人

深川ハ芭蕉ハ富士ハ千里
影ハ
富士川乃
ハ三ツ
ハ
ハ

注あの野川乃早瀬よかりし
深草乃波を志ら乃ぐにまさりて
高くそのゝ乃今ゝ乃と秋を
きゝ小萩ゝよの秋の風ゝよ
ひやゝかゝ人あすやきてはまん
と袖ゝの喰あなげ[illegible]
猶ゝ[illegible]子よ
あゝのかぶいゝて

いゝゝやゆちにゝゝれ
ゝるの毋ゝ[illegible]ゝの
又ハやゝんちを惠ゝ[illegible]
毋ゝ油ゝ[illegible]
唯是天ゝて油の性乃
ゝゝあゝゝ世業

大井川詠る日雨降れを
秋乃日乃雨降ゝよ　ちゝ
指ゝん大井川

眼前

乃乃へ乃乃末樓八てるよ
くもれ島
二十日餘り乃月うきうを枕て
山乃根ぎきいてくるよ年てる上
ゆもちもたをれ数里へゆき
雞鳴おくるすゝ杜鵑の早しけ
鳴ちもたをれ小松乃中山ゆ
ちもたをれ

馬耳峯て夜て弥生月
ちもたをれ

松尾や風瀑の伊勢に有る
を見る侍て十日きのふ見
ゝ子 此次ニ腰間ハ寸鉄をトゝ文章つゝきり

△
芳ゝあるを見侍りて一乃
鳥井ゝ陰ゝ侍乃ゝゝ法性
寺よゝまんゝゝ上もゝ

岩代松風の身をまとうて
姿のさまを都にて
みるに月毛なる牛を
拖（ダク）あり
腰間に寸鐵を不帶
一囊を負て年十八の
珠を推る僧下俗に
塵あり俗に似て

乘潛る事あるとい
製かきものハ浮屠也
屬る事ハ俗也神あ
入るゆゑさて人ビクリきこ嘉て外出を
詣とあり
西行谷の姫のとる深あのえ
ゆゑも乃芽出あ深ふ
いとあふ女西行
なるこのこのこ

其日乃うさ有る菓子を
早くるを手てうるとくるあん
あこの答る豊旬せよと云て寄の絹
もりくるを書付る

蘭乃香や蝶乃翅よ
あまくものき

閑人乃茅舎会
蔦植て行四五年乃蝶乃

なんちかの眉もやゝおいたり
と志ばし〱なきて
手にとらば消ん
なみだぞあつき
秋乃霜

大和国に行脚して葛下
乃郡竹乃内と云所はいる
故友ハ連い乃ちりしの舊里なれば

日比とゞまりて足を休む
○藪よりおくに家有
わたゆみや琵琶に慰む
竹乃おく

二上山當麻寺に詣て庭上乃松
をみるに凡千とせもへたるならん
大いさ牛をかくすともいふへけむ
かれ非情といへども仏縁にひ
かれて斧斤の罪をまぬかる

ルならず幸にして気つよし
僧形顔美之清浄
獨り郷のわたくしあはれ
年ふりとし山深く白雲
夜すがら宇の烟谷を埋みて
山路の家霧こそはちつきて雨
まことに浅き東よりひるまなし乃
達先の旅人の庵となるを
見しより此山に入て世を絶まし

ある人のおほくは詩によれり
五のしにのるにてや唐士の
廬山といはんもまことに
おもしろきや
ある坊に一宿をかりて
隠者もありしよりときはなきよや
坊の名
西上人の草の庵のあとは
奥の院より右の方二町ほどのわきにへ

程堂人宮うの
ものとなりぬる
いとまの
そもそもかかる
たもとうるる
露いとゝ
心ようなる世に
うぐひす
某是枝垂梅白実あり
うちまきて
梅由を出し
耳をのたれ

山を登りの坂を
斜に野川
流れたる
南方
大和の山城
入て
を見て
山集
周防の内侍我さへ野のと幸行きう古つて人とるひとの人きること
いうへへつるゝ
なるも
御廉年
伊勢の
絶て近江路
なつかしう
いまさら
常盤乃塚あり

俳諧乃書武がいとしるるもの
毎年俳諧風とゝいつて
乃変ゝまゝ わらん森もまゝ

義朝乃ふんよ似ゝ
あまの風

不破

秋風や藪も畠も
不破の関

不堪に流りゝる者を本国ゝ
やゝ有ゝまゝ武蔵野もゝ時
野さゝゝゝゝゝふゝ
出ゝし

死ゝもせぬ旅ねの果よ
あまの風

業平高ゝ
冬牡丹子角ゝ乃
ゝまゝ

茅戸乃宮にて夜あけまで
ほのぐらき中に濱乃うらもとて
あけぬるやうしの事一すじ
熱田にて
社頭大イに破れ築地ハくづれ
くず屋村にて一のくるかしこさ
縄をたゝきてとゝ小社ぞんぜんを
拝ミ夜に不ル出ずして其

神ゝと名乃るとゝあなーのふん
乃まくにて生てるとゝなるくるを月
ひ後ろもくらいなりける
志乃ぬさ杖て餅ハ
名護屋にて入ル道乃程諷
狂句風ハ身ハ
茅まくらハ

遊まんよありさて
市人よこの笠うら　雪の傘
猫人ふんる
馬ふさくなるこの子ある　雪乃道
海道て　は雪て
海れて　暗の中　ほの
雪みて　うす白し
雪て　雪て　猫寝　校
年れぬ　年　梅

年くれぬ　年　梅
といひくもり山家より　雪ふる
誰か墻て　歯屋は餅あり
大心良ふ　年乃年
寒なきや　屋のほと
二月雪て　彩雪山乃
水取りや　氷乃滝の雪崩

京にくだりて三井秋風の鳴瀧に
乃山家をとゝのふ

梅林

梅白し昨日やちるとぬきすれば

樫乃木乃花

のゆふぬきて

伏見西山行 住吉上人あつて

我宿ぬしの桃の雪まよ

大津にもるる乃道

やまの茅

湖水の朧動

宇崎の雲ハ

畫乃休てとて

腰をあつて

つ一いけして其陰を干鱈

吟し

さく女

菜畑乃

乾んぶ

水口まで十年を経て故人有り

今二月の中旬

伊賀の国蛭の小嶋の菜の花に

も去年の秋ならの形ならの弱

我家をまもりて乃枝乃隠れ

れて乃尾張の国まで踏を

しめる来る毎の

いさらめよ穂麦

此僧てしよ苦て回向する木

顛和尚と

むの月のはめ近花

まるまるまるまるまるまるまる

せるるて乃生んろよりの其角ご方

へ申ほのまる

梅こそて卯の花商を

なるれ

題 杜若子

白たまよりぐ蝶よ
こゝあひ桐葉子このりをて有て
今やあつまるゝんゝまるよ

牡丹苔菜蜂の〳〵ゝ
蜂乃居ぬる

甲斐乃山影てあちらよりて
ゆく駒乃麦よ踏すやらん

卯月の末いほりて
つゝのまをたゝて
なつかしう風をとる
佐〳〵さ

後へよ変〳〵酬和乃句
素堂乃跋あり今
器うく

元十四七り

洵船集 巻之二

芭蕉拾遺稿

維陽 風國撰次

春部

元日

[illegible]

二日

[illegible]

三日

[illegible]

四日

大津繪

京ちかく[illegible]

年ゝや新年の時末五十

鏡裏梅ト云句ヲ出タリ

人しれぬ身をうめや籠の内の梅

氏句案日本書の詞あり

年ゝや猫にとられまじる猫乃面

氏所ハいかゝ

蕗葉

しるべ音

たりて仮りうわりさをかうし

氏為鎮

やいせの初便

茅萱

蕗蕭よりふかい黄うの茅萱

古畑に芽つゝ行男ども

一ニ年ンハ一ニ月ニ芽ヲ

風麦庭

真ゝ多ちてしまぐ九月の野山

梅

網代民部ハ臭ヲ

梅乃まゝ猫乃ゝ猫乃ゝ

山里ハ万事おそ梅乃ゝ

梅ゝ香や

白上

子良館乃後ニ梅ありとつたへて

内子良子乃一すとて梅乃花

うんもやく乃きさらぎもさらぬ梅乃花

雲もやいろ〳〵おとろく乃ふ月と梅

旅の〳〵さて古巣ハ梅よなわるなり

かすへまぬ屋敷〳〵の梅梅

梅の香乃つとは乃もる山路なる

（西行）

梅みな年ごとに咲つゝ

手鼻かむ色さへ梅のさかりかな

そ乃女宣子

暖簾乃奥ものゆ乃梅

いの乃坪下乃うゝ

ふあ乃わるくさな香し

青年ふほへらるほる巡乃梅乃花

何葉新八月ものわるる年

一周忌ニ父梅九りとくゆ

白上

一茶杯ゝ乃ゝ
宿仲ゝ乃ゝ
程おもし

梅

この夜ゝ
餞し別　東武行

梅若葉まつ乃宿乃ゝ
水

門人何の
馬乃ゝ
ゝ

ゝ乃ゝ
梅柳

天和乃比乃吟

蛍

うゝ乃ゝ
蛍や柳乃ゝ

餅小墨つゝる梅の上　イ先キ

乃ゝ

[illegible]

嬬柳

[illegible]

柳

[illegible]

柳のさいはゝ柳の　柳のさいはゝと八史郎が辭ずはうそ也

傘を押分るる柳　[illegible]

八九百年を兩好る柳　[illegible]

雲雀

雲雀なく中山畑の雑草
影ふる日も薄りあるぬひとつわなる

栖去て雑草——　畧く
小文庫——こえ来

この雲雀うつ止よ体らの峠
なる

[illegible]
[illegible]

雉子

高野の雪

又曲がりきりの雪
蛇とりの間ハおろの雑草の影

つくもん

さらつまよ年泥おとろ出遊

陽炎

けうろうや 炎 朝乃糸 北薄

昇云

林せうしやきとうけうろう乃一二寸

伊賀新大仏之記 今昇之

文二年 陽炎高 石ろう色

真っ白

不性さやかな数さ川 真の白

の情水のうつ 前書の

真白乃まろ乃 雪ろう

真っ白や 蟬乃昇 たるねろる

紙きぬ乃ゆ ろうん 白乃 色

表面のうつ 氷つ 花のうつ

[illegible]

[illegible]なる都 遊行 瑠璃小歌 出雲

[illegible]て八方 [illegible]酒乃[illegible]

負メハ覚ル銭ノ神ノ

[illegible]浮世 [illegible]酒白く 食[illegible]

[illegible]白八延宝乃[illegible]

なのさを陀もも[illegible]に本ふきうるよ 鞠

大和乃[illegible]村

[illegible]乃陀 [illegible]

[illegible]

[illegible]白 [illegible]

いろ[illegible]

[illegible]乃八重 [illegible]

附ぎ[illegible]

一里ハ[illegible]乃[illegible]孫[illegible]

白上

十八

[illegible]と行脚して菅
笠山乃姿ゆゑとゝまるまゝあの
笠ハさこのうゑ山ハ[illegible]
しるる明方乃ゆきよ
いと艶なる紙乃神
乃こゝろ[illegible]と人乃れさ
つゝ[illegible]ゆゑ[illegible]

稲尾乃神

[illegible]

[illegible]乃尾折てかしらん山さくら

咲こゝろ

最中乃桃乃中よりつさくら
いつ迄乃[illegible]

[illegible]野

笠さこのゝ山ハ日比乃[illegible]

[illegible]納

[illegible]深き乃小山乃櫻

景清ハ笠乃[illegible]乃[illegible]ゆかしき情

西行像讃

すてはてし身ハなきものとおもへども
雪乃降る日ハ
さむくこそあれ花乃降る
日ハうかれこそすれ

花乃雲鐘ハ上野か浅草か

濁江にて

西行乃菴もあらん花の庭

二月十五日神路山を出るとて

西行乃なみだをしたひ
増賀乃信をかなしむ

何の木乃花ともしらぬ匂ひかな

裸にハまだ二月乃あらし哉

此裸の句奥にハ伊勢神垣に事て二入あもひさる無相にして

前後書遺とみえたり

桜をまもる猿のこゝろをあはせぬる

花よなぬぬすまの庵のこゝろよ

花よ寝ぬもはしもまくらひつ

猿雖之内習木

きちの花ハ稽古仕掛ケ

騒別

叶こゝろ推ちよ　花ちよ五器一具

種せすや　花乃さうまさつ　ゆ

花を吸　蝶なくゝ　ひゝ　なさゝ

ちるまもや　ちるまもおしと　湯ゝ　琴乃塵

こゝ乃句　琴ゝ大敵トハ生トハ

繪乃賛し

蘭ゝ乃ゝ　この文乃　花乃

其角ヵ曰　うまハ上野　うは仙ゝと

ゆゝ　おゝ乃　年乃　蕉

花病　都乃　脚　弟　弘

一聯　二句乃格　句を呼　句と

かゝん　七重　七堂　伽藍八宝

さゝ

宗世ゝ亭

花ゝと宿　ゝ　ゝ　孫　世日　設

明日八橋乃まとやの谷乃花
をれいくるるあり生のあ
ゆくへとをとしあきハいまさ
生前一樽乃ゐ乃一ゝ乃ゐ
あきてるろうハ枕まくらに
をとのふるうの文章ハ
撰集あり　をの
ゆくゝのゝ　ゝのゝ
きしさやろむ乃あゝめれ
あきもるろう
とうろ

山ゝ氣

鹿角琴
鶴乃巣ゝ品のゐ乃のさくらゑ

白ゝ千仞ぬ巻向もあゝ仏橋
酒落堂乃記巻ゝ
四方ゝ方ゝ乃ゝ陽入て湖乃海
芳野ゝ山乃まんとゝ伊賀
乃ゐゝ猿ゝ
刻乃社ゝ同行ゝ
とゝて檜乃ゝ
芳野ゝて檜乃ゝ
月　年　故主君乃
庭おゝて

峯白集の内
山家ナ記ス
…ありとあり

さ毎し乃半か由らもまた桜かな
むかう故郷まてあるらし

山さくら尾崎くまの先ゝ崎ゞ川

しましく八空も乃上なる月夜哉

うへ乃花
詞ゝ書ても まことはあり

四ッごき乃たわゝぬむしへんかれ

西武集
蝙蝠ともよ浮世のそとゝ

芭蕉翁吟

飲酒乃ミ ねまきる人乃纏年

月花もなくて酒のむ独かな

三聖人の圖

月花の是やまことのあるじたち

山吹や宇治乃焙炉乃匂ふ時

西行乃瀧の名句
届港

山吹夕

ほろほろと山吹ちるか瀧乃音

涅槃

ねぶつ繪や殺生合ふる珠數
乃ふる

神つるや おもしろ掛ふ涅槃像

首別

鮫乃ふ魚遣る別れ

家隆卿の歌

一本の野辺のむしろ迄ふる
ふるさとの時雨

蛙

古池や蛙飛込む水の音

二月 吉日 星祭

剃髪 入腎門 [illegible]

[illegible]

菩提山

此山のかなしさつげよ薢ほり

大和行脚のとき

[illegible]

日の暮かゝる[illegible]

[illegible]

此前書にて（づか）

草臥て宿かる比や藤の花

芳清 江

凍解て筆に汲干す清水かな

雲三

青柳の泥にしだるゝ塩干かな

草庵に桃さくらあり門人に其角嵐雪あり

両の手に桃と桜や草の餅

深川乃家蔵之

[illegible]

[illegible]

悔只れ

[illegible]

世や

雛乃嵐

[illegible]

[illegible]

猫乃こゑ

猫乃こゑ体さな閨乃朧月

麦飯乎一やの[illegible]猫の

里乃猫

進尾琴

猫の妻寵りく つまさより通ふ

蝶

蝶乃飛こゝの野中哉日影

[illegible]

[illegible]

蝶

蟬の乃賛

白魚や黒き目を明く法の網

大示衆にしめし故人を別る

三俣より別れ初めより鹿の角

二見乃圖を見侍りし

うかりける海乃面も浦風

神社樂

ぜんの屋より裾の三月の白中ーとなるう

何乃木の花とも志らぬほひかな

題しらず

末曾乃情雪や生ぬ新芽

歯にあたる身のおとろひや海苔の砂　イ

おとろひや歯にくひあてし海苔の砂

某方より海苔をもらひて（うりよ）

雀子と声し鳴かはす鼠の巣

菜畠をも旅するすゞめの巣

大比枝やしを引すてゝし

此句ハ翁の吟なるよし　一へのきこえ

まぬ実否ハしらず　ある人より

尾細しお襟いるゝ声の　しらしぬ

和襟えり葉ハ紫拾の　雨路

うすへしく草まゝに入ぬ袂かなるや

洒堂餞別

撫子や暑之て本より踏分身の奥

行春を近江乃人とおしみける

行春や鳥啼魚乃目ハなみだ

此句乃詞書　細道にあり